JIPA 専門委員会活動の経験について

JIPA 情報検索委員会　委員長
戸田　敬一

アジア特許情報研究会　創立 10 周年､誠におめでとうございます｡皆様のご健康を祝し、貴研究会のますますのご発展と会員ご一同様のご健勝をお祈りいたします。

ご依頼いただきました趣旨に合うものかわかりませんが、少しでも皆様のお役に立てればと思い、JIPA（日本知的財産協会）情報検索委員会で得た経験について執筆させていただくことにいたしました。

情報検索委員会への参加は、2005 年からです。開発から知財部門へ移って 4 年目のことです。それまで、社外活動をあまり行っていなかったこともあり、多くの企業の知財担当が集まる委員会は、私にとって新鮮なものであると同時に脅威でもありました。知財調査に関する専門用語が飛び交い、高い調査レベルの人材が集まっており、必死になって研究について行く状態でした。しかし、社内の限られた環境で行っていた知財活動とは異なり、競合をはじめ異業種の知財担当者がどのような業務を行い、何を課題とし、これからどうしようと考えているのかについて、垣間見ることができました。また、関係官庁との意見交換会などを通じて、民間企業と官庁との関係も知ることができました。何より、人脈形成が自分にとって大きな財産です。委員から副委員長、委員長へと立場が変わることで、知り合う人数は 5 倍、10 倍と膨れ上がっていき、今では、各界で活躍する著名人とも知り合うことが多くなりました。

情報検索委員会に初めて参加した当時は、全体に占めるサーチャーの割合がかなり高かったと記憶しています。研究内容も、特許ＤＢの比較検討や特許分類の評価、国内外の特許調査手法など調査手法に関連したものが主流でした。ところが、2010 年ごろから特許の活用を意識したものが増えてきました。これは、昨今話題になっている IP ランドスケープの源流と考えられます。私が 2008 年に副委員長として行っていた研究テーマは、「非特許情報を活用した知的財産報告書の作成について」であり、特許情報と非特許情報を交互に利用しながら情報の精度・絞り込みを高めていき、事業部門に納得性の高い提案を行うというものでした。これは、IP ランドスケープを適用した知財業務の考え方と大差ありません。自慢になるかも知れませんが、先見の明があったのではないでしょうか。しかし、当時は興味を示す人がいるものの、今日のような大きな反響を得ることはありませんでした。なぜなら、当時の調査・分析環境が今日のものに比べると、かなり劣っていたからに違いありません。現在の情報収集、分析環境は飛躍的に進化しています。これは、特許のみならず、非特許情報も同様です。

情報検索委員会では、先に述べましたように、情報を先取りして逸早く新しいものを研究テーマとして取り上げています。例えば、検索手法では、セマンティック検索や機械学習を取り入れた検索、類似画像検索などに関するもの、外国特許を扱う際に必要な機械翻訳に関するものなどがあります。特許分類では、IoT 関連特許に付与される広域特許分類の ZIT に関するものや CPC の最新情報など。活用系では、知財ミックスや各社の知財戦略を類型化して整理したもの、最新の IP ランドスケープに関するもの、特許情報と非特許情報の分析および活用に関するもの、オープンデータの入手方法と特許情報との組み合わせによる活用方法などがあります。この他、M&A における知財デューデリジェンスの研究も行っています。

情報検索委員会の委員長を務めさせていただき、今年で 2 年目になります。会社の業務との両立で多忙を極めておりますが、とても遣り甲斐を感じています。特に、外国での提言活動が印象に残っています。ヨーロッパの特許ユーザー団体である PDG には毎年会員として参加しており、会議での発表を通して日本の特許ユーザー代表として提言を行い、実際に EPO に反映された事例も多々あります。また、WIPO やヨーロッパ主要企業の知財担当との意見交換なども行っています。これらの活動で得た経験と人脈は、掛け替えのない宝物です。ここで、EPO へ反映されたもののうちの 1 つをご紹介します。特許分類 FI を使った検索を欧米文献に広げたい場合に、FI から CPC へのコンコーダンスを利用されると思いますが、EPO のサイトにアクセスし、「Statistical mapping: FI to CPC」のページを参照すると、FI に対応する CPC が統計的に表示されています。これは、FI に対応する CPC の付与状況を定量的に認識できるものであり、非常に便利な機能です。PDG への提言を始めて今年で 5 回目となりますが、毎年行ってきた提言や指摘に対して何かしら対応をいただいており、非常に良好な関係が築けています。

アジア特許情報研究会をはじめ、多くの知財関連の研究会や団体がそれぞれの特徴を生かした活動を活発に行っていることは素晴らしいことだと思います。知財関係者それぞれの目的に合致した研究会や団体が必ず見つかることでしょう。これは、各研究会、団体の主催者の努力あってのことです。恵まれた環境があることに感謝いたします。しかし、この恩恵を受けるには、自ら参加の意思を持ち、情報を得る必要があります。私自身の情報検索委員会への参加のきっかけは、上司からの紹介でした。読者の方々は、既に恩恵を受けている人が多いと思いますが、是非、周囲の方々にお伝えいただき、より多くの人々が恩恵を享受できるようになることを願っております。企業が知財に求めるアウトプットは、益々多様化しており、こうした分野、業種を越えた集まりによって、これに対応できる知財人材が育成されるものと考えます。

最後になりますが、当委員会に本寄稿をご依頼いただきましたことを大変光栄に思います。情報検索委員会を代表してお礼申し上げます。今後とも、貴研究会との協力関係が発展することを願ってやみません。

（2018/9/3 受理）